

行財政改革、財政状況など

Q 現在の日本は、自殺者の増加問題や多重債務問題、少子化・出生率問題等さまざまな問題を抱えている現状である。10年・20年先、雲南市は「希望の郷」の持てる市になるのか。市長の見解を伺いたい。

A 新たな視点に立ち返って地方と国とが均衡ある発展をするように、日本全体が発展すると思う。そういう思いを日本国民が共有する必要があるのではないかと。また、地方交付税に頼らざるを得ない状況から、いかに脱することができるかを改めて考える必要もある。合併を機にどういう「まちづくり」を推進していくか。そのこ

とを、地方自治体それぞれがどう考え、実践していくかが現状からの脱皮につながるかと考えている。知恵と工夫を發揮しつつ市政運営をしていかなければと思っています。

Q 合併して2年がたとうとしているが、合併効果は出ているのか。

A 結婚に例えると雲南市は6人が1つの家族になった訳だが、家風を出すには10年必要だと思っている。まだ目に見える合併効果は出ていないが、10年以内に行財政改革を一層すすめていかなければならない。また、9月議会に諮る雲南市総合計画で平成26年度までのまちづくり計画を提示するが、その中で施策の評価を行っていく予定である。

雲南市長のこころ

先般は梅雨前線による集中豪雨により雲南市でも甚大な被害が発生し、掛合では1名の方が亡くなられました。心からお悔やみ申し上げますと共に、被災された方々に對し衷心よりお見舞い申し上げます。

この度の災害を教訓として、これから策定する雲南市の地域防災計画にしっかりと活かさなければなりません。

9月3日に、木次のチエリヴァホールで、地域自主組織の三新塔あきば協議会主催で「自主防災研修会」が催されました。多くの参加者があり、各地の災害事例から普段の備えの大切さを改めて認識されたことと存じます。

雲南市では現在36の地域自主組織が発足しておりますが、各組織ともこれまでの地域での取り組みを踏まえ自主組織活動に取り組んでいただいています。そうした活動の一つとして、是非とも自主防災への取り組みを加えていただきたいと思っています。

そうした地域の取り組みと行政の施策ががっちりとかみ合うことが地域防災対策にとって最も大切なことだと思います。

(雲南市長 速水雄一)

その他意見として

小学校の跡地を宿泊施設に活用して農業学習体験を行ったらどうか。新聞記事によると平成16年度の「人口1人当たり地方債発行残高」が雲南市はワースト5に入っていた。第3セクター整理なども含め、計画的な市政運営により、未来に期待がもてるような雲南市にしてもらいたい。

竹炭を利用した産業振興に市も力を入れて欲しい。

まとめ

この他にも懇談会へ参加していただいたみなさんからたくさんのご意見やご提言がありました。すべての掲載はできませんでしたが、懇談会に寄せられたご意見やご提言、その回答につきましても、ホームページにも掲載予定にしていますので、ぜひご覧下さい。

市では、みなさんから寄せられたご意見やご提言を新しいまちづくりに活かしていきます。

懇談会へ参加していただきありがとうございました

三刀屋町発

わがまちの

巧み

このコーナーでは、地域に根付いている伝統工芸や地域ならではの活動をされているみなさんを紹介していきます。

養蜂家

今月は、三刀屋町粟谷にお住まいで、ミツバチを使ってハチミツを採取する養蜂家であり、雲南養蜂組合組合長の陶山幸吉さんを紹介いたします。



2種類のミツバチ

日本では、ニホンミツバチとセイヨウミツバチの2種が、採蜜や受粉のために飼育されています。

近年の養蜂では、ニホンミツバチに比べ、採蜜能力の高いセイヨウミツバチが多く使われていますが、陶山さんは、希少な養蜂種でもあるニホンミツバチも飼われています。

繁殖期のミツバチの巣は、1匹の女王バチと数千匹のオスバチ、そして数万匹の働きバチによって構成され、女王バチは1日に2千個ちかく産卵します。

養蜂用の巣箱ひと箱（1群）の中には、採蜜用で4万から5万匹、花粉交配用で6千〜1万匹のミツバチが暮らしています。

養蜂作業

陶山さんは、2百群ほど飼育しており、**定置養蜂**（地域内で、その季節に咲く花から採蜜する）**移動養蜂**は特定の花から採蜜するため季節ごとに移動する）で採蜜をされています。

春先から夏場にかけて、山王寺や日登、久野地区など市内を中心にサクラヤレンゲ、アカシアなど季節の花蜜を採取

しています。

また、イチゴやメロンの花粉をミツバチによって受粉させるための巣箱の貸出しもされています。

このほか、日々の巣箱の手入れや越冬用の貯蔵蜜の管理、スズメバチの駆除、分蜂（逃亡）を防ぐ群数調整など、1年を通じて数多くの作業があります。

自然とともに歩む養蜂

陶山さんが養蜂をはじめられた昭和22年当時、水田の肥料にもなることから、この地



方でも辺り一面にレンゲ畑が広がっていたといわれています。

それから半世紀あまりの間、養蜂業は、開発による花蜜の減少や外国産ハチミツの輸入、農薬普及によるミツバチへの汚染、後継者不足などにより衰退してきました。

しかし、自然の恵みである貴重な山蜜の採取や生態系保全にもつながる受粉は、その重要な役割を果たしています。現在、陶山さんは息子の一三夫さんとともに養蜂活動を続けています。

「養蜂業を取り巻く環境は厳しいが、息子が継いでくれることはうれしく思う。この辺りでも蜜源が減ってきたが、自然の流れに逆らわず、昔ながらの方法で養蜂を続けていきたい」と話してくれました。